

グライスの会話の含みとそれに対する循環論について

太田みどり

私たちが行っている会話のやり取りでは、ときどき失敗してしまうこともあるように感じる。そもそも、なぜ私たちは無意識のうちに会話をうまく成り立たせることができているのだろうか。私は言語哲学、特にポール・グライスの提唱した会話の理論や含みという考え方に興味を持った。現在までに、会話の理論や含みが循環に陥っているという批判がなされているが、本論文ではそのような循環についてどのように捉える事ができるのかについて考察を行った。

まず、グライスや彼の理論を発展させたレヴィンソンの考えについてまとめた。グライスは、会話を行う際に会話者が遵守するものと期待される一般原理を協調の原理と呼んだ。これは会話の中で発言する際にその言葉のやり取りにおける方向性を踏まえたうえで、当を得た発言を行うようにすべきだとする原理であり、その原理の条件となる会話の理論が守られていないように感じるときに生じるのが[含み]である。特に、[含み]には[特殊化された会話の含み]と[一般化された会話の含み]という2種類があり、後者について焦点を当て、擁護しようとしたのがレヴィンソンである。彼はスペルベルとウィルソンの関連性理論に反論することで一般化された会話の含みを正当化しようとしている。

グライスやレヴィンソンの考えの中で私が最も興味を持ったのは、[グライスの循環]と呼ばれる議論についてである。グライスの循環とは、[言われたこと]を先に決定しなければ[含みとされたこと]も生じないというグライスの説明に対し、[言われたこと]を確立するために含みがある役割を果たしているように見えるということである。つまり、言われたことは含みを決定するのと同時に含みによっても決定されているように見え、それが循環に陥っているのではないかという議論である。グライス自身は、認識的な循環の可能性については簡単に触れるにとどめているが、一方で、レヴィンソンは意味論と語用論の区別に重要性を持たせるためには必ずグライスの循環が影響してくると述べている。レヴィンソンは、グライスの循環に対する反論について考察したうえでそれらの反論がうまくいっていないことを述べ、含みを前もって適切な形で考慮しなければ、真理条件の配列(つまり文全体)が正しい真理条件を導き出さない場合があることを説明するために[語用論の侵入]という枠組みを提供している。

グライスやレヴィンソンの考えを踏まえたうえで、考察では、グライスの提唱した協調の原理は必要なものであり、レヴィンソンの提案した [語用論の侵入] という考えは否定することができないということを示した。[語用論の侵入]が悪しき循環ではないことを主張し、この枠組みについて新たに日本語での考察を行うことによってこの考えの有用性について補強した。

(指導教員 横山幹子)